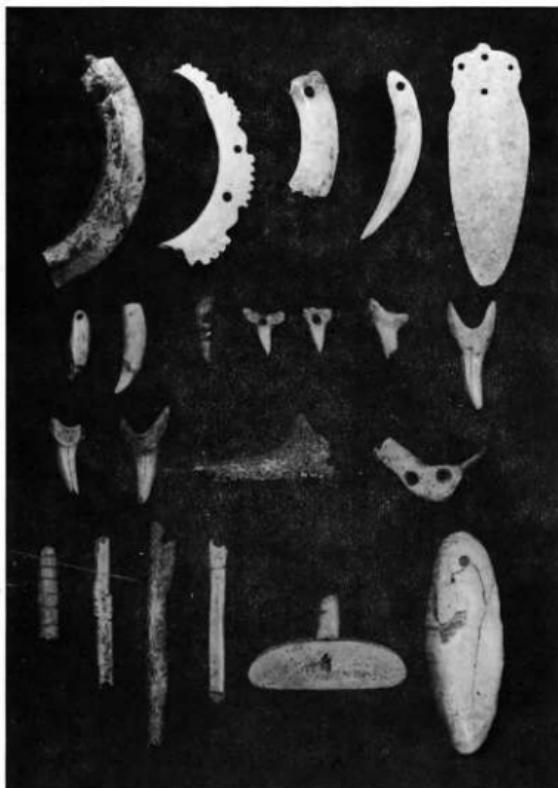


峰町文化財調査報告書 第8集

佐 賀 貝 塚 (略報)



1986

長崎県峰町教育委員会

管される予定である。

例　　言

1. 本書は、長崎県上原郡峰町大字佐賀486にある佐賀貝塚に亘る緊急発掘調査の略報である。
2. 調査は昭和60年4月8日から同年5月10まで、峰町教育委員会が国庫および県費補助を得て実施したもので、長崎県文化課主任指導主事正林謙・同課文化財調査員村川逸朗が調査を担当した。
3. 人骨の調査には長崎大学医学部解剖学第2教室の松下孝之・別郷哲秋・中谷昭二氏が当ったが、昭和62年度に刊行を予定している本報告で結果を報告する。
4. 獣・魚骨の調査には早稲田大学考古学研究室の金子浩昌氏に依頼し、今回その概略について玉稿を賜った。
5. 貝類については長崎県立野母崎高等学校教諭山本愛三氏に依頼し、今回その概略について玉稿を賜った。
6. 峰町役場産業課畠田春男氏には地形実測に同町教育委員会には連日の現場調査活動に直接参加された。また土地所有者早田和之氏には建物建設遅延の承諾を快く与えられた。
7. 九州大学助教授西谷正氏には、来島いただき指導點言を賜った。
8. 本書の執筆・編集は正林が行い、遺物の撮影は正林・村川によった。本書の遺物実測は正林、トレースは村川によった。
9. 本遺跡の出土遺物は、昭和60年度末現在長崎県文化課に保管しているが、昭和62年度に本報告刊行後は、峰町教育委員会に移

1. 調査の発端

昭和60年3月4日、対馬峰町教育委員会から急報が長崎県文化課に寄せられた。全国遺跡地図長崎県3-27の佐賀貝塚包蔵地において、遊戯場建物建設に伴う整地工事が着工間近であり対応策について指導を得たい旨であった。県文化主任指導主事正林謙は、翌5日対馬にわたり、関係者と現地を実査し、関係者と協議を行った。佐賀貝塚は昭和28年発見され、翌年増田綱一氏等によって一部が発掘され、県内に数少ない绳文中期遺跡であることが確認されていた。

協議の結果、現状での遺跡保全は困難であり、緊急発掘調査不可避の事態であることが確定された。土地所有者早田氏と相談の結果5月初旬まで、調査に必要な期間、工事着手が猶余されることになり、緊急発掘調査体制の確保について諸般を調整することとなった。その結果、国庫および県費の補助をうけて峰町が調査を実施することになり、昭和60年4月8日から同年5月10まで、県文化課主任指導主事正林謙・同課文化財調査員村川逸朗の担当で緊急発掘調査が実施された。



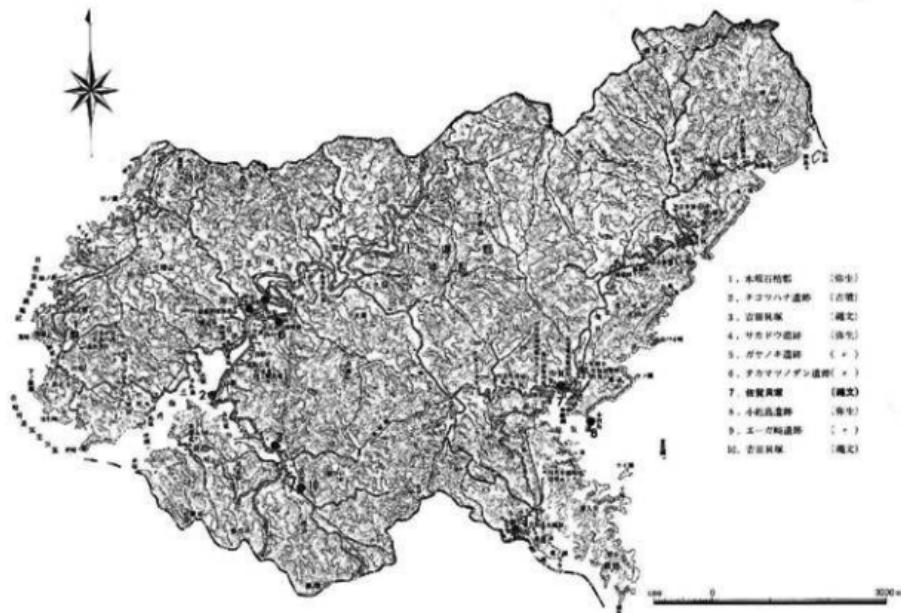
第1図 対馬および佐賀貝塚位置図

2. 佐賀貝塚の位置と地理的・歴史的環境

佐賀貝塚は、長崎県上原郡峰町大字佐賀^{3,4}に486他にある。対馬が九州と朝鮮半島の間にあり、朝鮮半島の方により近い(対馬北端 箕山間 約50km)ことが知られている。対馬島は南北約82km、上(南)島・下(北)島からなるが、標高に比して艦船であり、海岸に直接山地は急没し、平地は極端に狭隘である。全島面積710km²は佐渡・淡路島につぐ広さであるが、その88%を山地が占め、現今の中落とてはぐく離された海岸部に散在している。対馬の地質基盤は新世代第3紀の夏岩と砂岩からなる、対州層群とよばれるもので水の浸透や風化に対して著しく脆弱である。このため小片の岩屑となつたものが河川をつたって流下堆積している。

一方、対馬島の海岸は複雑なリアス式海岸と屹立する海岸からなり、砂質地形の海岸は稀少である。対馬島周辺の海流は対馬暖流とよばれ、二分して対馬の南北を北上するが沿岸水と混合して変化に富む海水の状態になる。海底地形も複雑で、変化に富んだ礁灘が多く、好漁場を形成している。かかる海水と海底地形はブリ・イカ・イワシ等の回遊魚やウニ・サザエ・ヒジキ・ワカメ等の根付資源疊かである。

峰町は、対馬島下島のほぼ中央部と東西海岸にわたって展開する町域を有するが、山地は東



第2図 純町および町内遺跡分布図

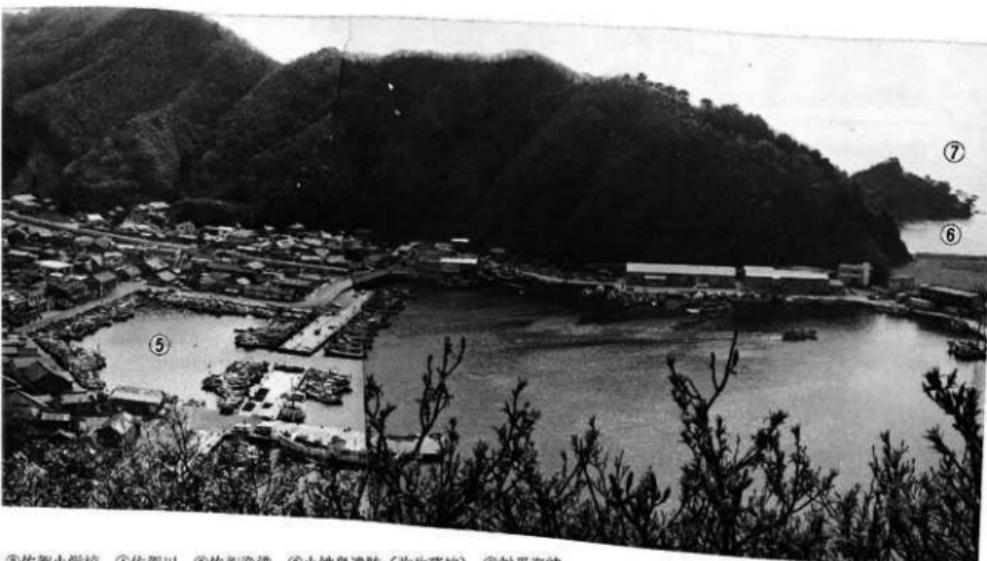


図版1 佐賀集落周辺（西方から）①県道佐賀・木板線 ②佐賀貝塚（発掘地点）

辺に片寄り、対馬島内有数の平地を有する西半部と平地に乏しい東半部とを分けている。町内には著名な遺跡があるが、朝鮮系遺物を多く出土したガヤノキ遺跡等があり主として三根地区（西岸城）に集中している。一方、峰町東岸域は遺跡が少く、本貝塚の他に小姓島遺跡（弥生時代墓地）やエーガ崎遺跡を数えるにすぎない。

対馬における縄文時代の遺跡は少いが、主として西海岸にあり、越戸遺跡（上原町）、志多留貝塚（同）、西加藤遺跡（豊玉町）等があるが、押形文期の遺跡は確認されていない。

佐賀貝塚に至るには二様の方法がある。福岡県小倉港から海路で対馬島北東端の比田勝港に上陸、バスを利用して南下する方法、海路約6時間、バス約1時間を要する。博多港から壱岐島経由の船便で対馬島東端の厳原港上陸、バスで約2時間北上する方法、海路の時間は比田勝まわりと同程度の所要時間である。一方、福岡市板付空港および長崎空港からの空路（約30分）で対馬空港（美津島町）に至り、同空港から約1時間強北上する方法がある。



③佐賀小学校 ④佐賀川 ⑤佐賀漁港 ⑥小姓島遺跡（弥生墓地） ⑦対馬海峡



図版2 土層の概況（右方が海岸方向）



図版3 調査地点の状況 ▲ 着手時点 ▼ 発掘調査の状況





3. 貝塚周辺地形と調査の概要

佐賀集落のある峰町東岸地区は、同町東邊に片寄った山地によって同町西部地区と隔てられている。この山地は、ホノ山(198m)等に見るとく、低標高であるが山容陥屈で対馬の山容に共通している。現在は同町の東西を佐賀トンネルが結んでいるが、対馬の集落のほとんどの例に見るとく佐賀集落も同町西岸地区と地形的には隔てている。佐賀集落は対馬東岸に注ぐ佐賀川と駄道川の河口

周辺に密集しているが、高山(143m)を中心とした小半島に擁された佐賀浦に南面していって、好漁港になっている。

本貝塚は、佐賀浦に西から注ぐ駄道川の河口近くに立地した、狭隘な海浜に立地しており、北背は急傾斜地になっている。佐賀集落内に弁天を祀る小岩山が突出しているが、かつては規模な砂嘴が貝塚地点と結んでいたらしい。現在、貝塚の南邊は県道佐賀・木坂線が走り、人が密集しているが、後世の埋立てによるもので、旧海岸線は貝塚の南邊50m程度であったと考えられる。一方、貝塚を含めた集落一帯の狭隘な海浜は対州層群を基盤としているが、その風化岩屑が微細粒となつた砂に覆われ、雨水の浸透はきわめてすみやかで、砂地は不安定である。後述する住居跡の柱穴構造は、この脆弱不安定な砂地形によるものであろう。

本貝塚は、昭和28年に縄文時代中期阿高式系の太形凹文土器を出土する遺跡として発見され、翌29年増田精一氏等によって小発掘が行われており、その跡は今回の発掘によって確認し得たところである。今回の発掘調査は、先述の地番約500m²を対象としたが、包蔵地は約400m²程度であり、その全面を発掘した。調査は、当該地をほぼ東西および南北の基線によって4mの方眼に分割して実施した。遺跡は、当該地番の東邊約200m²を占める縄文後期貝塚、ほぼ中央部に構築された4棟の建物跡、北西隅をわずかに占める縄文中期の破碎貝塚(昭和29年の小発掘地点)からなっていることが確認された。当該地番の南西隅は、往時の旧海浜になっていたと考えられ、有機物を含まない岩屑が不安定な状態で堆積していた。なお、今次の発掘によつて埋葬人骨6体、散乱人骨2体分を検出したが、建物跡群の東邊に直接した位置にあり、縄文後期貝塚の崩落による破碎貝塚下において検出された。なお、後期貝塚の南邊的一部分は、海浜岩屑と交互に沖積した状況があり、貝塚の時代の後に数回、波にあらわれたらしい。現在の貝塚の表面は最高所で標高2.5m程度であるが、貝塚形成時においても、ごく海浜に近く立地していたらしい。



図版4 佐賀貝塚発掘出土の歴史時代遺物（縮尺5分）

4. 佐賀集落の歴史時代

13世紀前半以前の対馬はかならずしも明らかでないが、当時対馬では阿比留氏が富強を誇っていたらしい。寛元3年（1245）、太宰府の命をうけた宗重尚が、阿比留平太郎を討ち、以後の対馬は宗氏の支配下に入り、明治維新に至るまで宗氏支配が続き、佐賀の地も宗家三代の間は、対馬島の主邑の地位を占める。

佐賀貝塚の西方200mに名刹円通寺があるが、宗氏の「佐賀三代」の間、高麗との接應の場であったとされ、鐘楼には朝鮮梵鐘がある。

図版4に示した船載陶器・石硯・平瓦片は佐賀貝塚南辺の表土層から検出した。この中で注目されるのは、灰白色の平瓦片である。厚手平瓦で

凹面に緻密な布目圧痕を残し、凸面は斜格子状の圧痕を全面に施しており、 7×6 cm程度の方形区画をもっている。この種瓦当は、最近対馬島内においても良好な資料があり高麗系の瓦と考えられる。佐賀の地は、宗氏三代の後、15世紀前半には、対馬島主邑の地位を、同島東南岸の府中（巖原）^{（註1）}の地に譲るが、朝鮮通信使の来島については接應所の役割を担っていた。高麗・李朝期の朝鮮系瓦当資料は、近年出土例が散見されるようになっている。福岡県銀世音寺、^{（註2）}鳥根県富田城、^{（註3）}未確認ながら対馬上県郡上原町稻置神社がそれであり、沖縄県首里城「癸酉年」^{（註4）}の瓦はつとに知られている。図示していない資料であるが、李氏朝鮮の常平通宝、北宋の皇宋通宝（1039銅）等の11～12世紀代の通貨がある。

15世紀前半以降、対馬島の主邑は南東海岸の巖原の地に移るが佐賀の地は朝鮮通信使の上陸と接應の場所として利用されており、その国際的な位置を示している。

5. 古墳・弥生時代

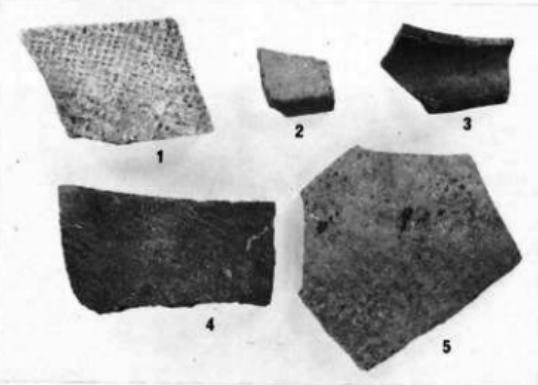
峰町内における遺跡の中で、弥生時代の遺跡は著名なものが多いが、古墳時代遺跡としては同町西部三根湾口のチゴノハナ遺跡がある程度である。東岸地区においては、古墳時代の顕著な遺跡はないが、弥生時代遺跡としては佐賀湾口の小姓島（註6）遺跡が著名である。

佐賀貝塚における古墳時代および弥生時代遺物としては図版5に示した須恵器と、弥生式土器片31点が表土から出土した。

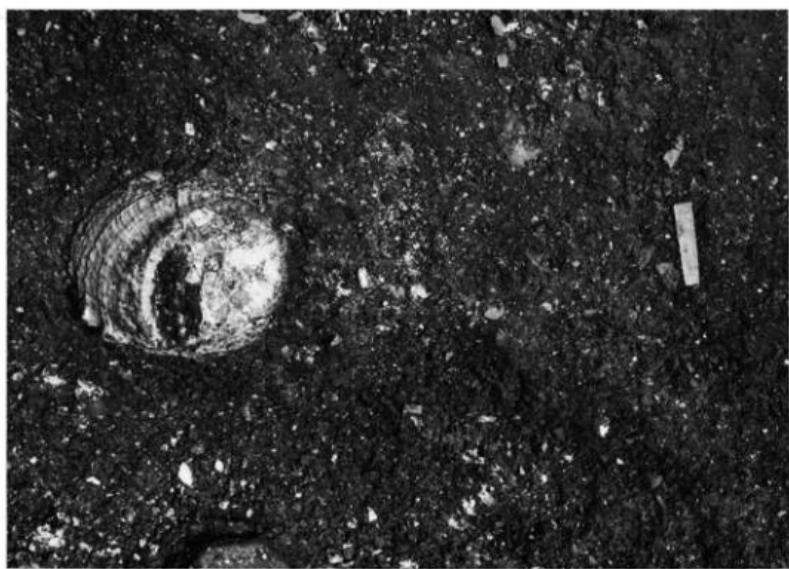
須恵器は図示したものがすべてで、器形・規模等かならずしも明確でない。

弥生式土器は、カメ形土器の口縁部が多く、一部長頸ツボの袋状口縁の破片（9）がある。6～8はいずれも口縁部が逆L字の断面をもつもので、断面三角形の貼りつけ突帯を口縁部に近くもつもの（7・8）と、もたないもの（6）がある。いずれも弥生時代中期前半代のカメ型土器とすることができるよう。

ところで、本貝塚地点では、昭和32年に土地所有者が庭先にゴミ捨て用の穴を掘られた時に「切り石をつかった石棺が出土した」といわれている。関係者の話を総合すると、幅は50cmぐらい、長さは1.3m程度で、数枚の板石で蓋がしてあったといわれる。また微細な骨片が残っていたといわれる。箱式石棺の長軸寸法が比較的短かったとする関係者の記憶を信じるとすれば、弥生時代の石棺であった可能性が強いといえよう。



図版5 佐賀貝塚表土層出土の須恵器および弥生式土器（縮尺3分の1）



図版6 貝塚と遺物

6. 繩文時代後期

佐賀貝塚は從前、繩文時代中期の貝塚とされてきた。昭和28年の発見、翌29年の小発掘の結果によるものである。今回の発掘調査においてもそのことは確認されたが、中期遺跡は調査地番の北西隅から西隣の地番にまたがるものであることも確認し得た。今回の調査結果によれば調査地の大半は繩文後期の遺跡であり、繩文中期遺跡と境界を接する形で成立していることが確認された。本遺跡の細部については、昭和62年度に本報告をまとめる予定であるが、以下にその概要を示しておこう。

(1) 貝塚

後期貝塚は大字佐賀486番地の東半部において、180m程度のひろがりをもって破碎貝層と純貝層のひろがりをもっていた。このうち純貝層部分は東辺の50m程度を占め、主要部は東隣の地番にあると考えられる。一方、破碎貝層部は純貝層の堆積が崩落して展開したもので、貝塚南辺の海岸砂が崩落した貝層の上に堆積し、更に崩落した貝が堆積するという状態を2回繰りかえしている。したがって破碎貝層は二次的な堆積であると考えられる。(図版2)

純貝層の厚みは50~60cmであるが東辺程厚く、東壁では70cm程度の厚みを持つ。破碎貝層の下は対州層群の微細な砂層で有機質を多く含んでおり、後期遺物の包含層になっている。

(2) 建物跡遺構

調査地点のほぼ中央部位において密接する建物跡4箇所を確認した。いずれも黒褐色の砂質土層面に構築されており、平地式3棟(1・3・4号)、堅穴式1棟(2号)である。細部については本報告にゆずるが、大小多数の柱穴を有し、炉跡を有するもの(2号)とそうでないものがある。いずれも柱穴の側辺に板石を配し、基底にもには同様の措置を施している。このことは、砂地が微粒でサラサラした状態であり、柱穴のみをもってしては固定することが困難なためと考えられる。2号は約4.5m程度の径を有し、中央部に炉跡を構成する立石が残っていた。

4号建物は平地式であるが、柱穴の配置がもっとも広い範囲を占め、石斧の未成品と砥石群が多く出土しており、工房的性格を有していると考えられる。



図版7 細文後期の建物遺構 ▲ 全景（西側から） ▼ 2号建物跡



(3) 石斧の並列状態

遺跡の北辺部、遺跡北背の急傾斜地に近い部位で、図版8に見るごとく、本遺跡でも最大級に属する30cm程度の石斧が5点、並列する状態で検出された。それぞれ刃部を交互に配した状態にあり、意識的に配した可能性がある。

石斧工房跡と考えられる4号建物の北背後の位置におかれ、周辺になんらのものも配していないが、さらに検討を要しよう。

類似例は五島列島宮下^(註8)貝塚(縄文後期)があり、13本の石斧を重ね、石囲いの状態であったといわれる。また、佐賀県菜畠^(註9)遺跡でも磨製石斧4本が一部重ねられた状態で検出されている。(縄文前期)。

(4) 埋葬遺構と人骨

埋葬人骨6体、散乱人骨2個体分を検出した。埋葬人骨はいずれも屈葬位をとっているが、6号人骨の場合は仰臥屈葬位をとっている。浅い土坑が掘られ、埋葬の後に扁平な石材で上面を覆い、アワビ貝を副葬している。

1号人骨は扁平磨製石



図版8 石斧の並列状態

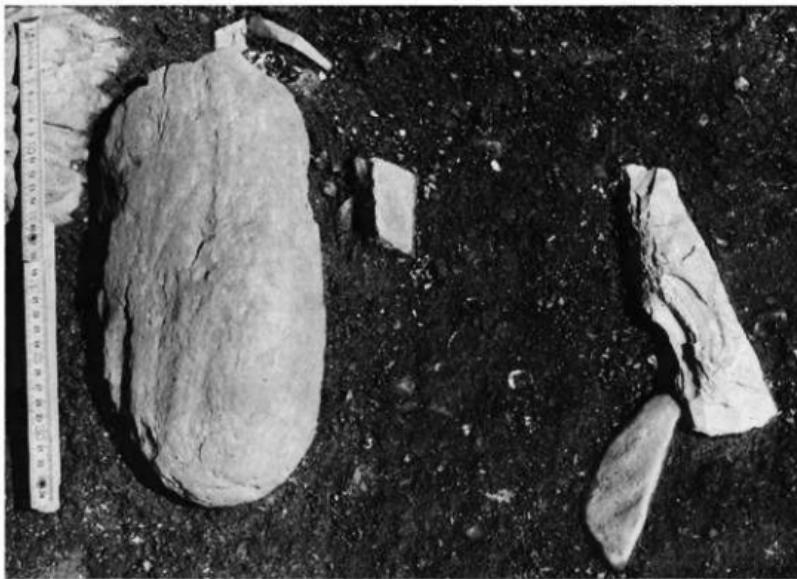
斧を、2号人骨は土器を副葬している。アワビ貝等の副葬例は西北九州の各地に見られ、弥生時代においてもその例が知られるが、対馬島において副葬習俗が軌を一にしている点は興味深い。

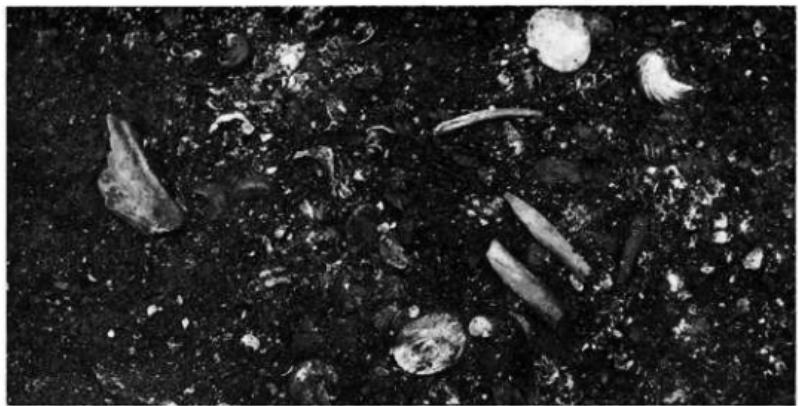
埋葬人骨は、いずれも建物跡群の北東部において検出されており、居住空間に近接して埋葬が営まれている。



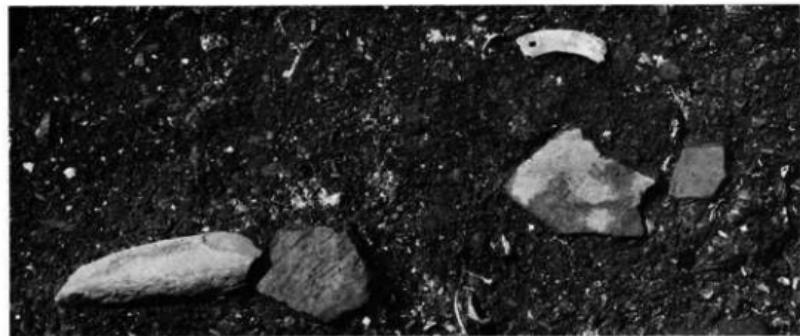
図版9 埋葬人骨（6号人骨）



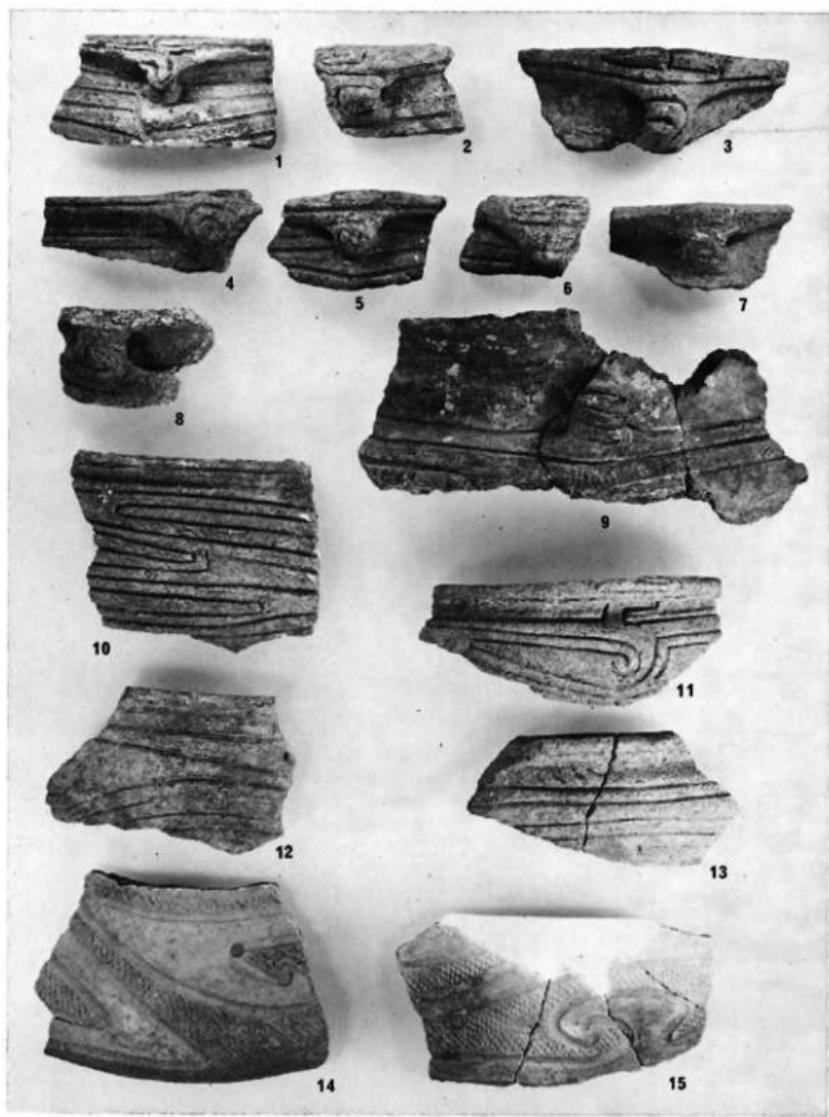




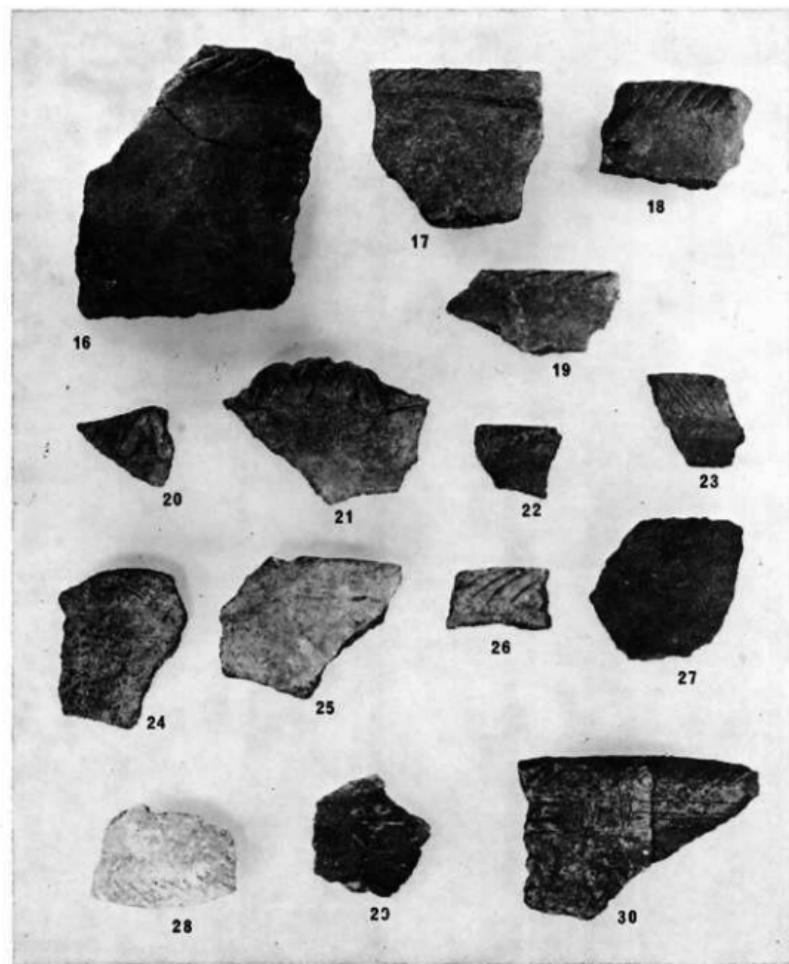
圖版12 遺物出土狀況 ④



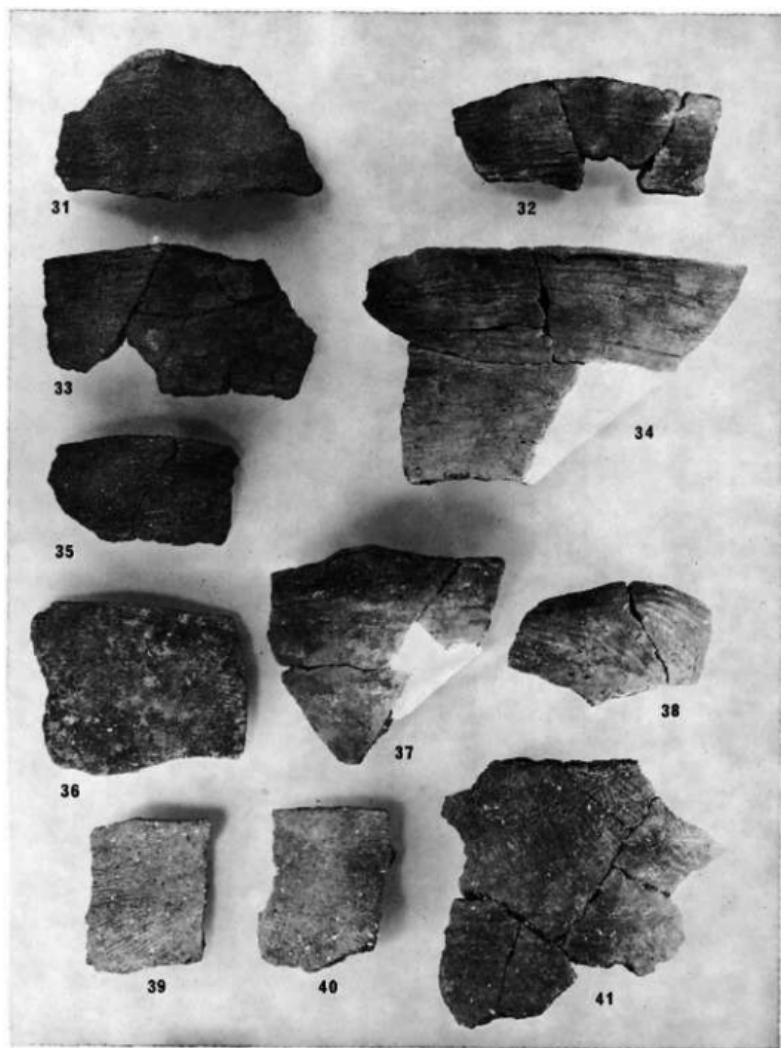
圖版13 遺物出土狀況 ④



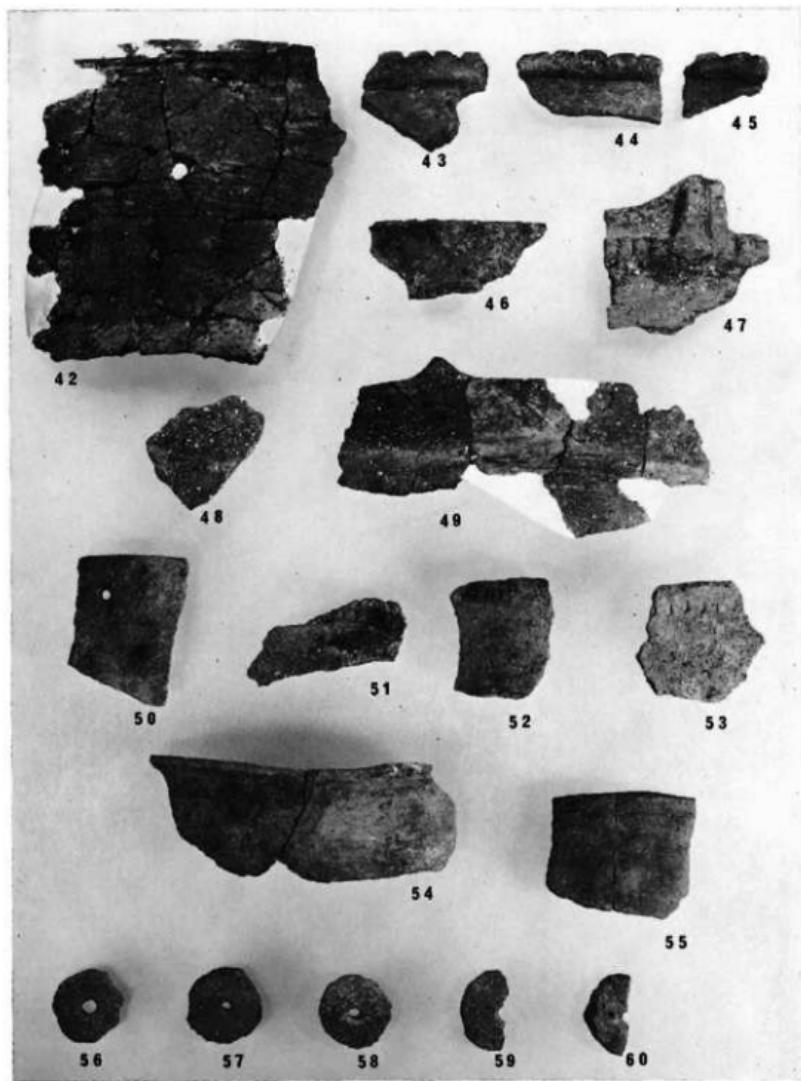
図版14 縄文後期の土器① (縮尺 $\frac{1}{6}$)



図版15 縄文後期の上層②(縮尺1/4)



図版16 細文後期の土器③(縮尺5%)



図版17 細文後期の土器④および土製品(縮尺5分)

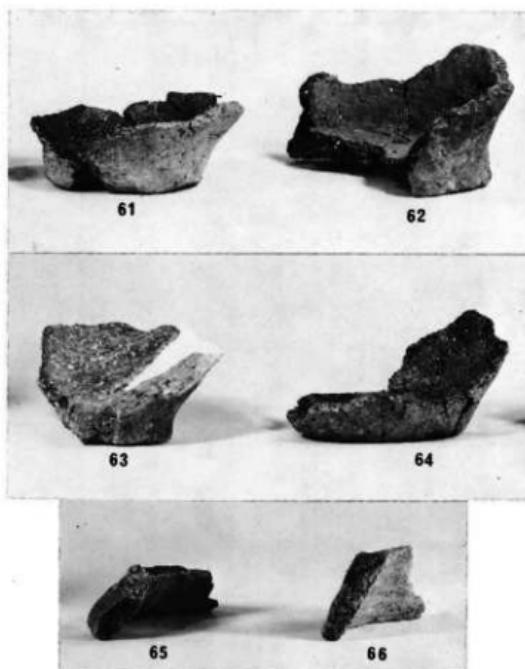
(5) 出土遺物

A 土器

佐賀貝塚出土の繩文式土器15,143点のうち、縄文後期の土器が最も多く、13,162点、約87%を占めている。

磨消繩文系の上器・波状口縁上の逆W字様の貼りつけを特長とする北久根山式系の土器・貝殻条痕文系の土器・その他の後期土器として貝殻粉末を多量に含むもの(47~49)・肥厚する貼付口縁に斜格子を有する48・竹管刺突文を有する50・51等を一応、まとめて図示した。

これらの各上器の中には朝鮮半島系有文土器との関係を予察されるものも含まれているが、検討を含めて詳報したい。



図版18 縄文後期の土器⑤ (縮尺3分)

B 石器

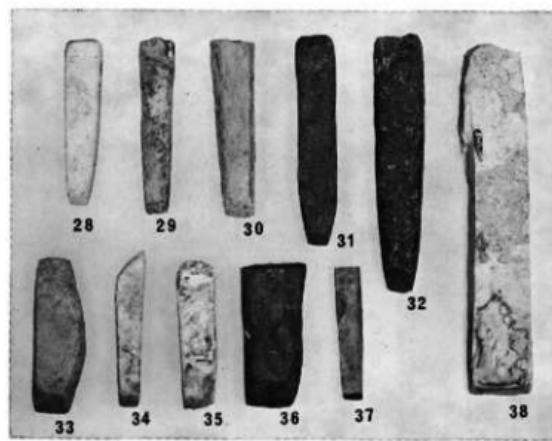
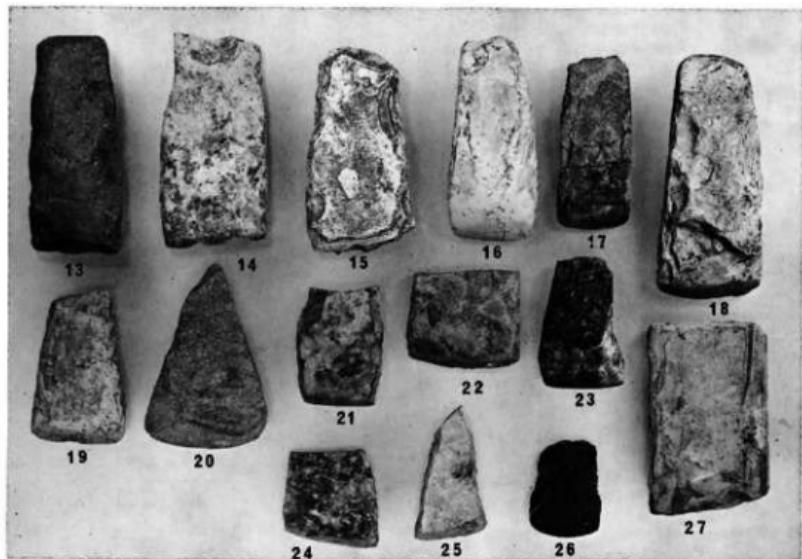
石器総数4,447点を検出した。この中には石斧・砥石・敲石等の穀器・黑曜製の剝片石器がある。石器を概観して特長的な点をあげてみよう。

I 石斧

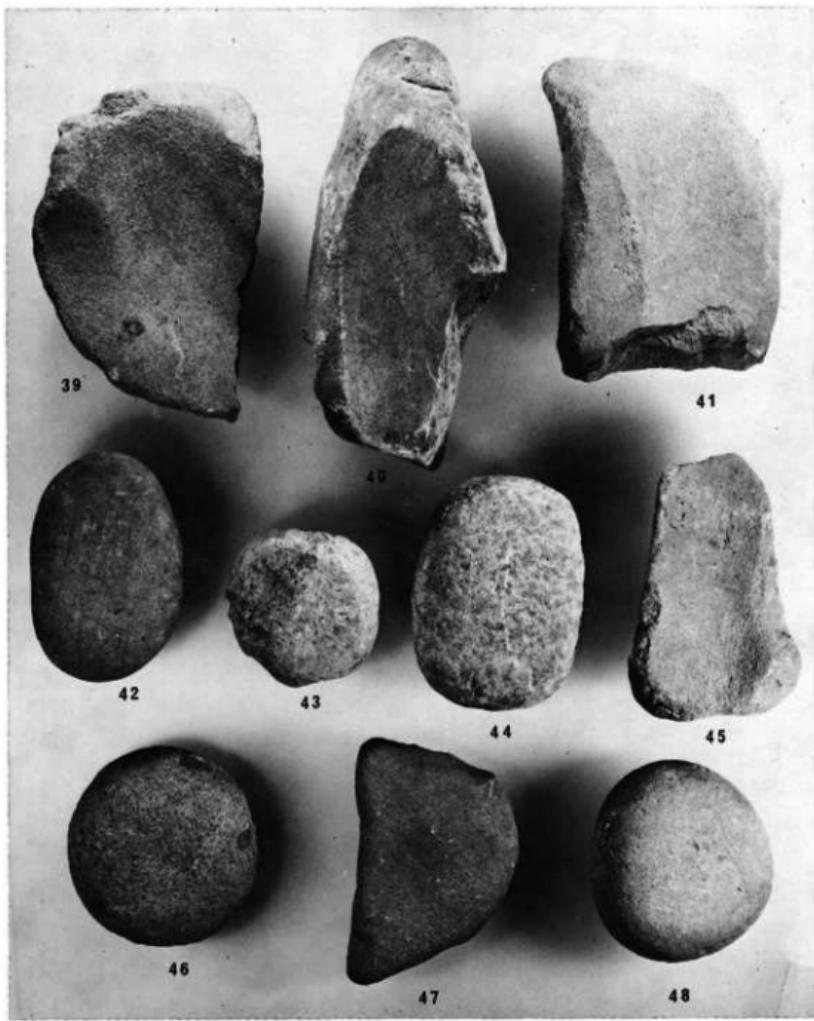
石斧総数316点が縄文後期層および貝層から出土している。発掘面積に比して大量出土が目立つ。このうち、未成品が183点(57.9%)を占めており、未成品量の占める割合が注目される。このことは、砥石28点との関連とともに注目されるとともに、17点(80.9%)が4号建物跡から出土している点は重要である。



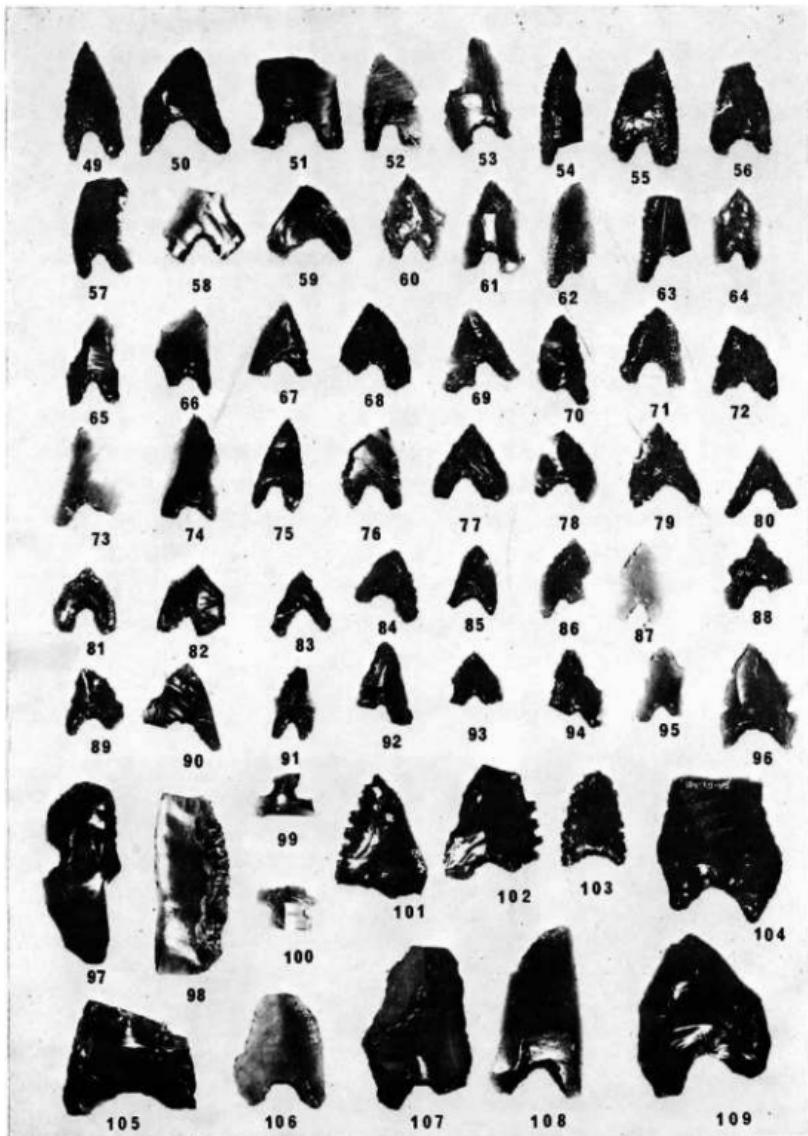
図版19 總文後期の石器①(縮尺1/2)



図版20 縄文後期の石器②(縮尺柾)



図版21 純文後期の石器③(縮尺34)



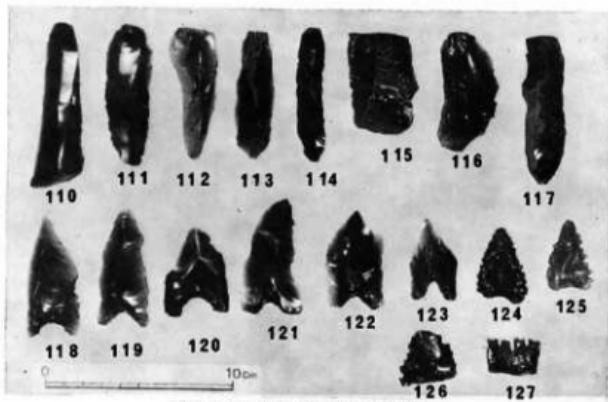
図版22 縄文後期の石器④ (縮尺1分)

一方、図版20に示した石器群のうち、13～27は扁平片刃磨製の石斧であり、28～38は石ノミ状の片刃石器である。これらの石ノミは、弥生時代に顕著に見られているが、縄文時代においても、鹿児島市草野貝塚・大口市瀬ノ下追跡等の南九州縄文後期遺跡や外海町出津追跡・諫早市有喜貝塚等西北九州においても出土例が知られている。佐賀貝塚の11点は最も多い出土量であるが、弥生時代所産の同種資料との比較検討や分布範囲の検討を要しよう。

本遺跡出土の石斧の石材は島内産の黒色頁岩と鱗状の楕円面をもつ青白色石材が用いられている。後者の石材は研磨によって美しい縞文様が現れ、弥生時代の磨製石剣と同種の石材であるが、対馬島上対馬町産の石材である可能性が高い。同種石材製の石斧がどの範囲にまで分布するか興味深い問題である。

II 黒曜石製剥片石器

佐賀貝塚出土の黒曜石製の石器および剥片は総数3,741点を数える。これらの剥片石器の中で注目されるものは、101～103、124～127の大形石鏟（石鋤）であり、104～109、118～123の大形剥片鐵（石鋤）である。これらは軸柄に装着する刺突具と考えられ、大形魚ないし陸獣を対象にするものと考えられ、対馬縄文人の生活を知るうえで興味ある資料であるが、黒曜石そのものは129の石核に見られるごとく角礫状の大形原石が用いられている。黒色半透明の良質な石材であるが、肉眼観察の範囲では伊万里腰折産の石材と考えられる。115は粗質不透明の石材であり、壱岐島産と考えられるが著しく稀少である。対馬島内には黒曜石原産地を有しない、対馬島の黒曜石原産地については目下産地同定中であるが、対馬縄文人の行動範囲を考えるうえで重要である。



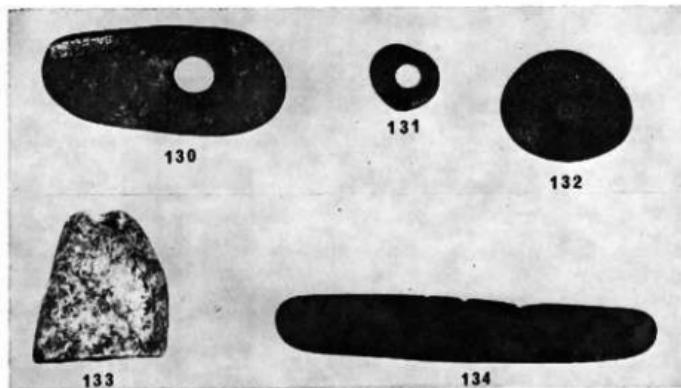
図版23 縄文後期の石器⑤（縮尺1/2）



図版24 純文後期の石器④(縮尺1/2)

Ⅲ 石製装身具

石製装身具は多くはないが、図版25の5点がある。朱の残る大珠147や小豆色の美麗な円形の垂飾のはか、淡緑色斑のある筋鉈形の資料150は、縦に穿孔されている。この資料は長崎県西彼杵半島西岸、角力灘沿岸の「長崎ひすい」とよばれる変成岩製と考えられる。151は長円扁平礫の一側に、すりきりの刻みを施した資料であるが、一応装身具として扱った。



図版25 純文後期の石器⑤(縮尺1/2)

C 骨角貝製品

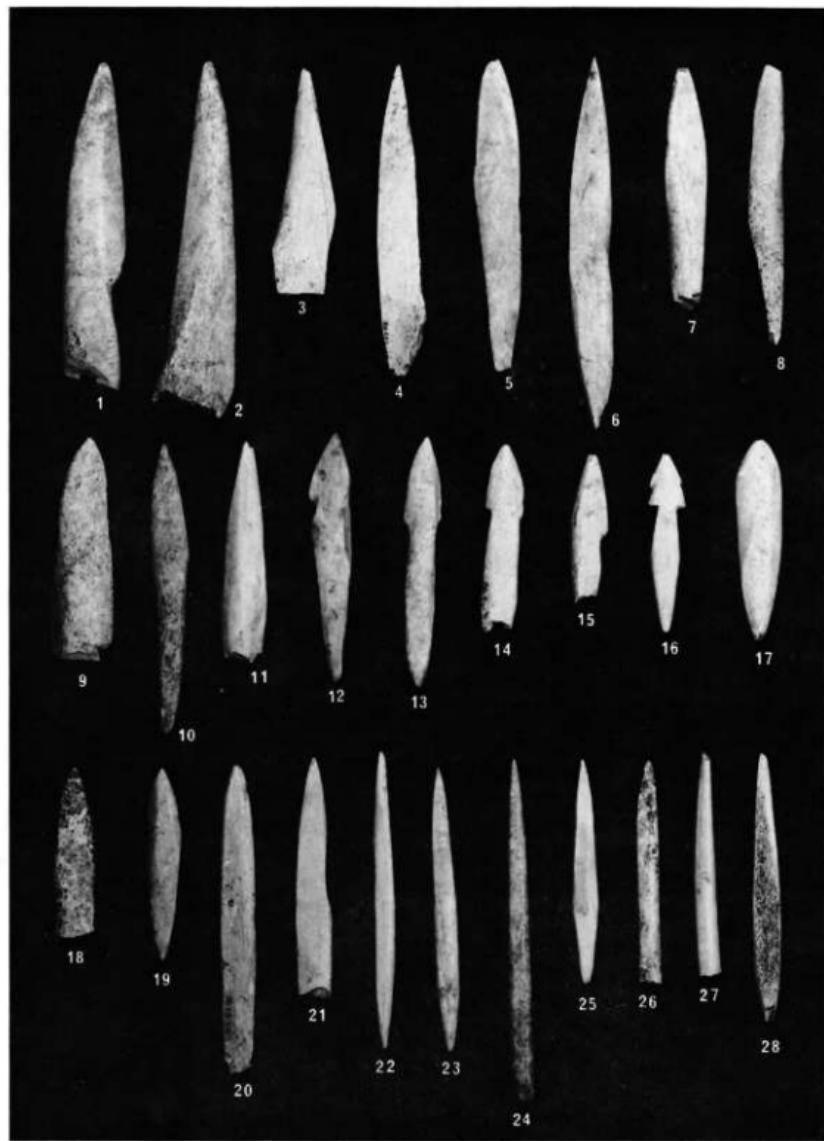
佐賀貝塚出土の縄文後期の骨角貝製品は豊富で既に述べた。獸骨製刺突具216点、複合・單式釣針26点、裝飾具22点、貝製飾4点、貝輪133点等がある。骨角貝製品の他には、金子浩昌氏執筆の後項に略記されているように、多数の動物・魚骨の遺存体があり、縄文時代における対馬の動物相を検討する好資料がある。この点については、本報告において執筆されることになろう。骨角器のなかには、成品ないし原材料をあきらかに朝鮮半島等からの搬入したものがあり、対馬の位置を再認識させるものがある。

I 刺突器（図版26・27）

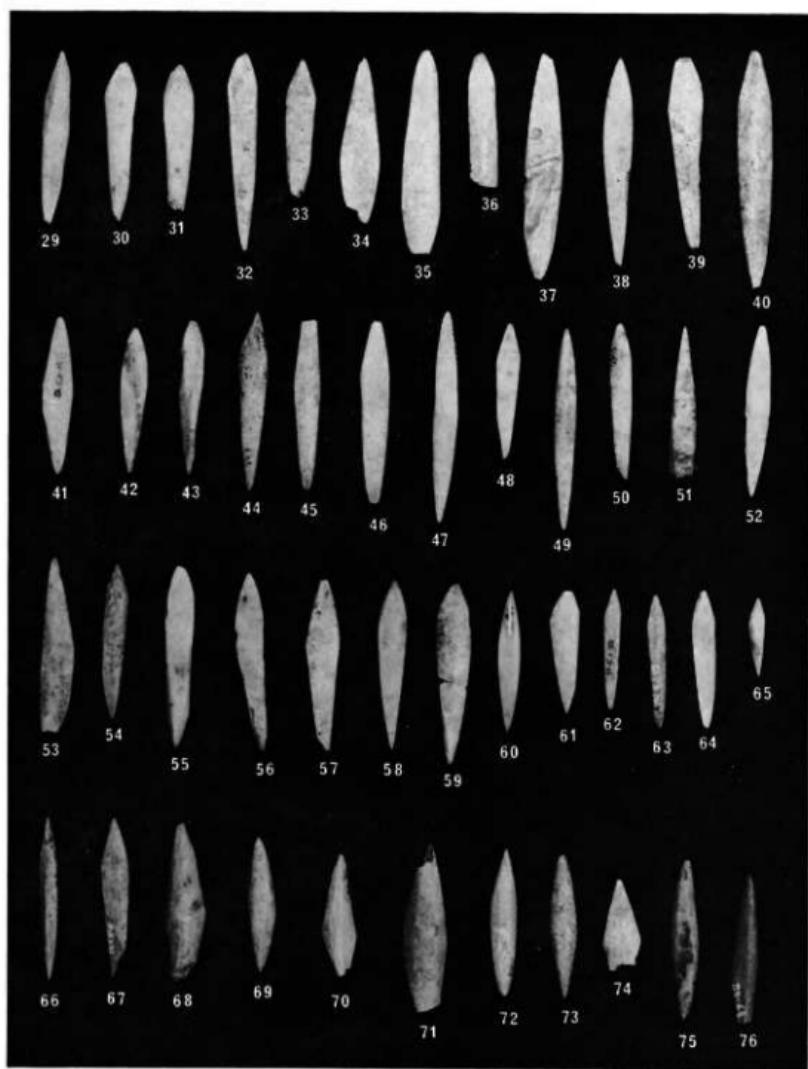
総数216点がある。全長10cm（図版26-24）から、同2cm（図版27-65）まで大小の骨製刺突器（ヤス）である。形式分類は目下検討中であり、詳述を避けるが、①離頸鉗形・②結合せ形・③環状のカカリをもつ形・④一端もしくは両端を鋭く研磨したのに大別できそうである。図版24・25についてこれらの大別を適用すれば、①（1・2）・②（68～76）・③（9・13～16）・④（その他大部分）ということになる。さらに200点を超す本貝塚の刺突器については細分可能であるが、再検討して本報告時に詳報したい。

II 釣針（図版28）

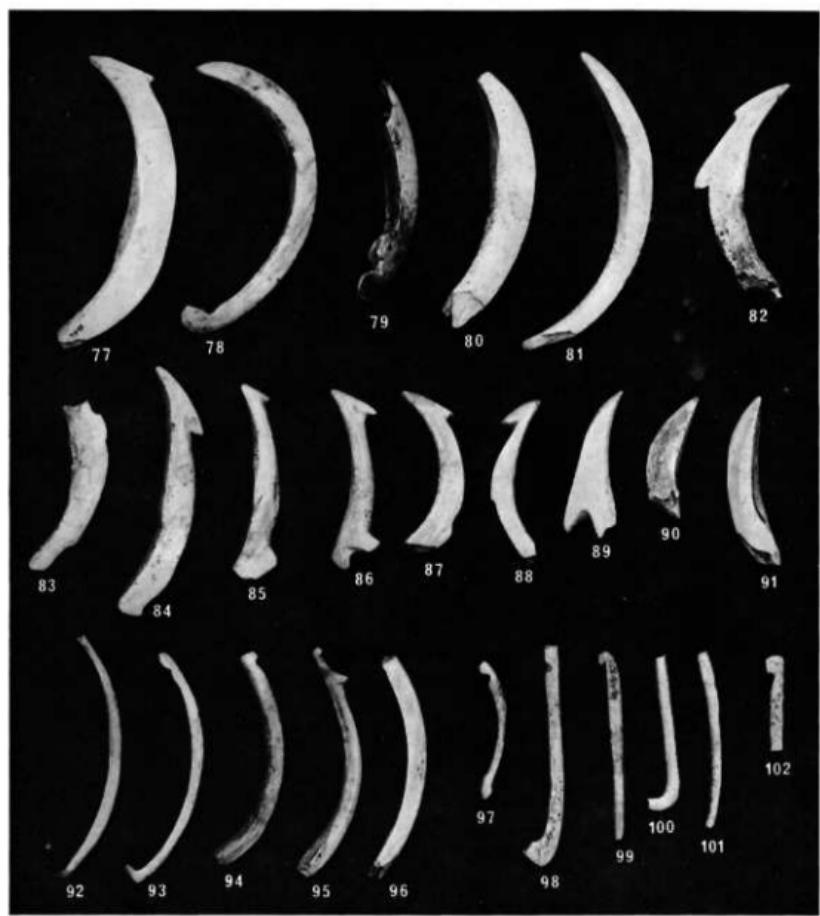
結合式釣針（77～95他）と單式釣針（96～101他）がある。結合式には77他、渡辺氏のいう極大形、83他の大形ないし中形の資料があり、間氏のいう小形はない。一方、單式には96他の資料が相当する。これらの資料を原材料についてみれば、結合式は雄イノシシの下顎犬歯が用いられており、上顎犬歯および雌イノシシの犬歯の利用例はない。また、雄イノシシの下顎犬歯の左右使用比率はほぼ同数である。また、鐵の位置についていえば、下顎犬歯の歯冠部を作り出したものが多い。これらのイノシシ下顎犬歯製釣針についても、目下検討中であり詳述を保留しておく。84～86の資料は結合釣針の完形品であるが、ともにイノシシ雄下顎犬歯で作られ、結合部状況のよくわかる資料である。これら結合釣針の結合部の形状は、上老島貝塚のそれに類似していることは重要である。図版28の96～101は、骨製單式釣針である。イノシシ下顎犬歯製結合釣針に比して、全般に細身で、完形品は少いが、それぞれの凹形状を大要、うかがい知ることができる。これらも西北九州形として把握することができる。



図版26 調文後期の骨角器① (縮尺2倍)



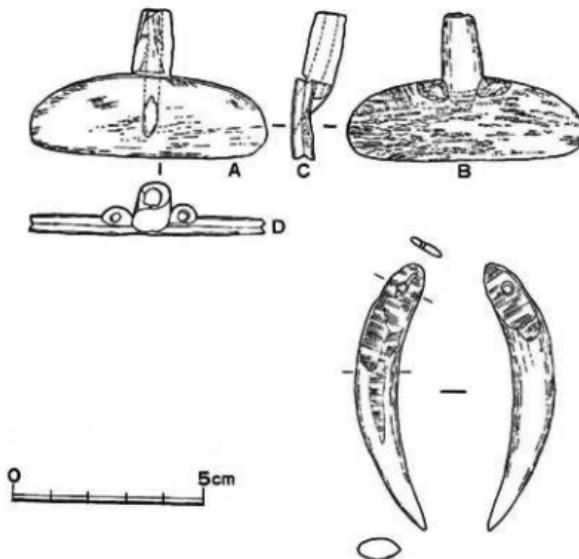
図版27 紹文後期の骨角器② (縮尺5%)



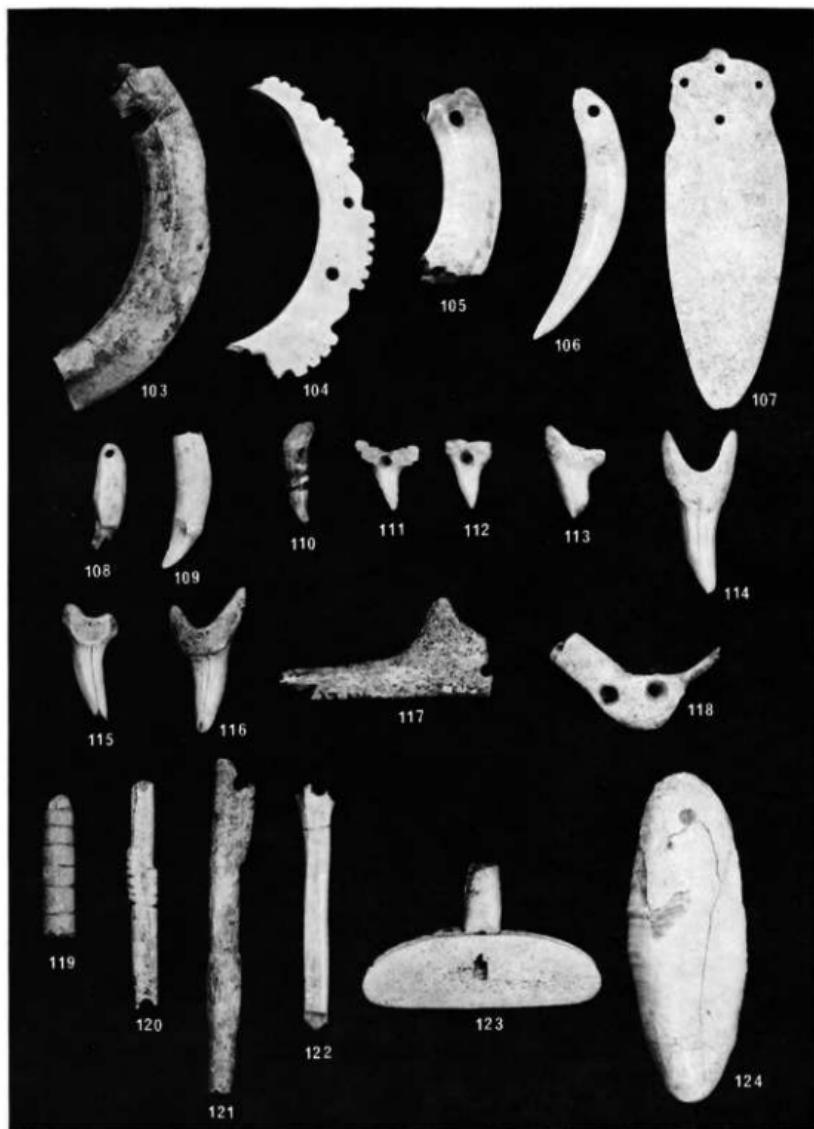
図版28 猪文後期の骨角器③（縮尺%）

III 骨製垂飾他の骨角器（図版29・第3図）

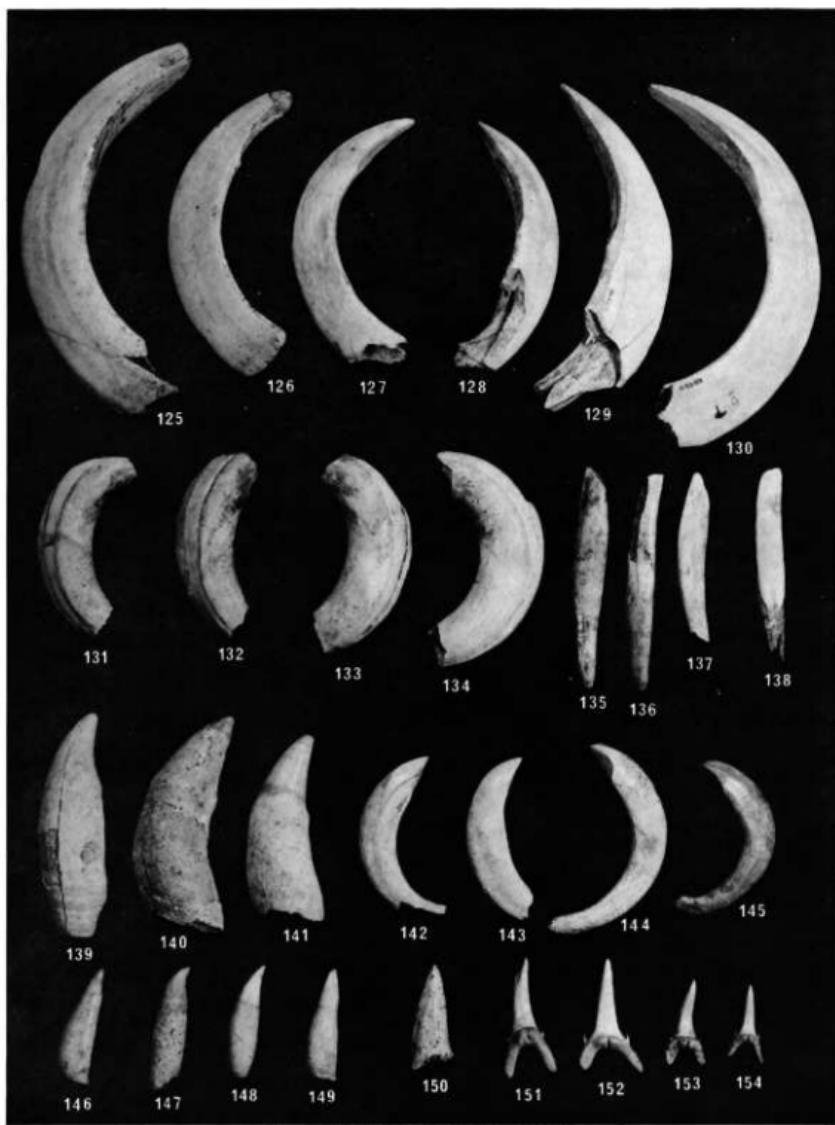
齒牙製の垂飾102~105、107~111、123があり、イノシシ下顎犬歯、サメ歯、ゴンドウクジラの歯等が用いられている。113~116は未穿孔の垂飾か牙鑑の類である。117は刻み目と穿孔をもつ骨製品、118はいわゆる腰飾の類であろう。注目を要するのは106のキバノロ上顎犬歯製垂飾^(图16)であり、朝鮮半島からの輸入品である可能性が高い。さらに、123は鹿角製の異形骨角器である。図示したごとく、扁平な長円形の板状部と上端の円筒部が一体構造をなしており、円筒部の穿孔は板状部の中央に通じている。また、円筒部と板状部の接点部には小孔があけられている。一方板状部の側縁には溝がめぐらしく、なんらかの繊維溝となっている。この種の異形骨角器の出土例はきわめて類例に乏しいが、民俗例によれば、図の板状部に鹿の胎児の皮を張り雄鹿の鳴声を出す発音器があり、形状・構造ともに酷似している。本例はいわゆる鹿笛と考えられる資料であり注目される。



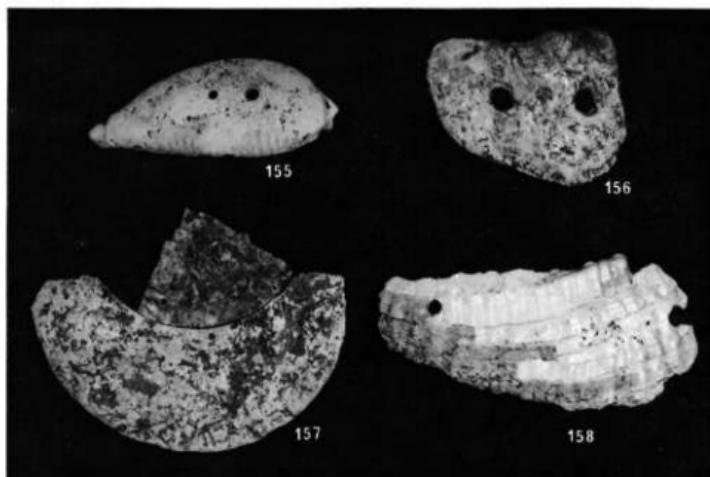
第3図 鹿笛形骨角器・キバノロ犬歯製垂飾実測図（縮尺%）



図版29 縄文後期の骨角器④（縮尺2倍）



図版30 脊文後刷の骨角器⑤歯牙類（縮尺%）



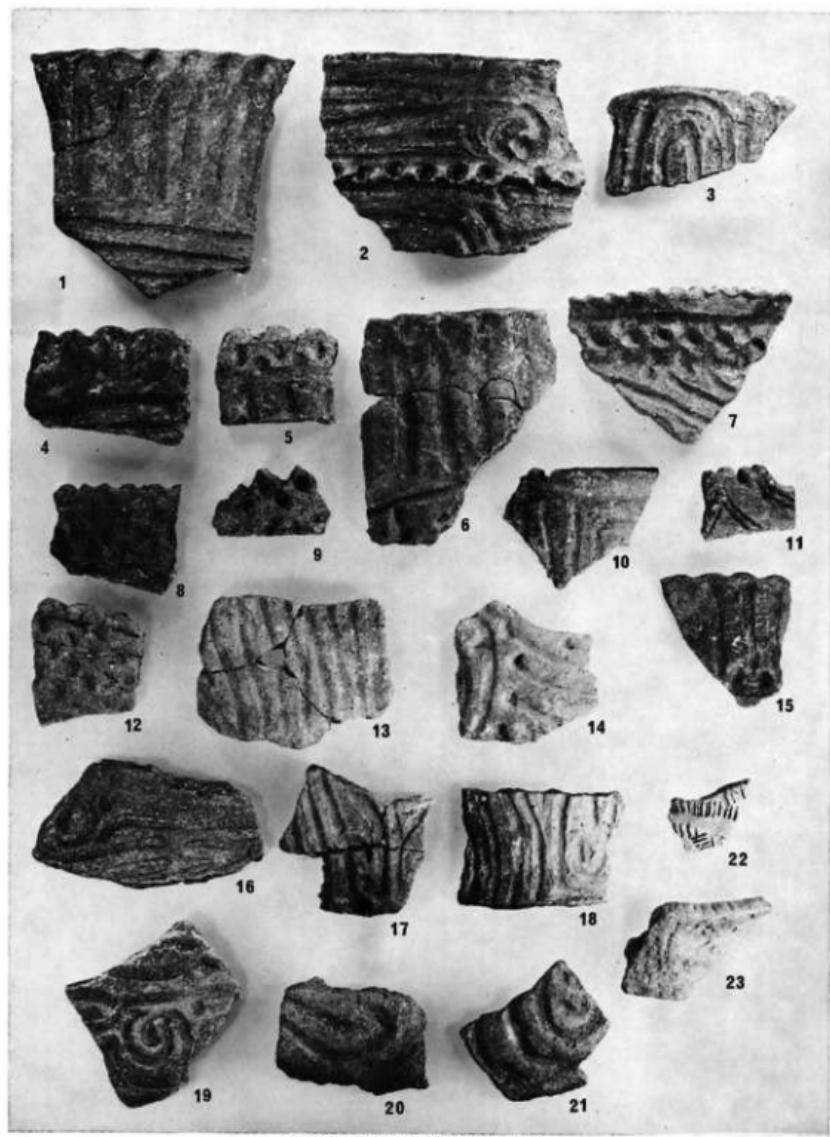
図版31 縄文後期の貝器（縮尺4%）

7. 縄文時代中期

佐賀貝塚における縄文中期遺跡は、発掘地点の北西隅のわずかな面積を占め、破碎貝屑として認められた。特に造構を残していないものの、包藏地の大半は発掘地点西隣の宅地下にひろがっていることが予察された。其伴遺物の状態も明晰ではないが、土器は良好な大形片が多い。

多くは暗褐色の胎土に多くの滑石粉末を混入している。器形はかなりずしも明瞭でないが、太形凹文の施文は口縁部から底部におよんでおり、安定感のある底部を伴っている。図版32の22・23の土器は、従前並木式と称された土器の系統に属するが、対馬島における出土例を従前見ない。この並木式系の土器は、近年、対馬島の南、壱岐島名切遺跡でも出土例があり、九州島北限の出土例として注目される。

(出典)



図版32 繩文中期の土器①（縮尺3%）

8. 長崎県対馬・佐賀貝塚出土の脊椎動物遺存体

金子 浩昌（早稲田大学考古学研究室）

佐賀貝塚からは多くの魚・爬虫・鳥・獸類の遺存体が出土している。骨は発掘時の破損があったものの、一般に保存は良好で、当時の漁獲、狩猟の実体を直接にあるいは間接的に示す好資料といえよう。それらの概要を記すと次のようになる。

1 魚類

サメ類の椎体が多数出土している。ネズミザメ科、メジロザメ科の椎体がみられ、特に後者の大型の椎体が目立った。もちろん、一個体で多数の椎体をもつものであるから、椎体の数で個体数の多少を直ちに論ずるわけにはいかないが、一つの特徴として把えることはできよう。タイ科ではマダイの出土が多い。これは前頭骨、前上顎、歯骨などの骨から個体数としてももっとも多い種類であったことを推定してもよいであろう。縄文期貝塚から出土するマダイは一般に大型であるが、木貝塚の場合も同様で、体長1mに達する個体も稀ではなかった。クロダイ、ヘダイといった種類も含まれたがその数はずっと少ないと。

カジキ類は椎体など数点を数えるのみであったが、これも巨大なもので、体長2m以上と推定されるマカジキの前上顎骨がある。これらは折れているが、鋭い吻端の骨は槍先などに使うこともできたであろう。その他佐賀貝塚を特徴付ける点として、イシダイ、コブダイ（カンダイ）があげられよう。量的にはマダイ程多くないが、これも大型の個体の頸骨、咽頭骨がある。特にコブダイは全長1mになる大型の個体があったと推定している。

フグ類も多かった種類であり、その他ハタ類、ブリがあり、いずれも大型の骨をのこしていった。

2 爬虫類

ウミガメ類の骨があるが特に多くない。大きな四肢骨があったが、その両端をイヌにかじられて短かくなっていた。脂肪質でやわらかいウミガメの骨はイヌが好んでかじったのである。

3 鳥類

鳥骨の出土も多い。その大部分は海鳥であってこの貝塚を特徴付ける動物種であったといつてよいであろう。量的に目立ったのはアビ科、カツツブリ科の鳥骨で、アビ、オオハム、それに中型のカツツブリである。アカエリカツツブリと思われる骨であった。アビは魚群の在りかを知らせ、縄文人たちの生活に深い関わりをもつ鳥であったろう。ミズナギ鳥科の骨も多少含

されているようである。この科の大型鳥であるアホウドリ科の骨が1乃至2個体分はみられた。ウの類の骨も多いのも、岩岸海岸のあることから考えられることである。ウミウ、ヒメウの四肢骨があった。

少量ではあるがワシタカ目の骨がある、トビト大型のワシ類である。キジの骨が数点と、カラスの骨がこれも数個体分があった。

4 哺乳類

イノシシの歯牙、骨が大量に出土している。それに比べると他の哺乳類の骨は僅かなものであった。例えば、シカは下顎骨が1点、四肢骨が10数点という数である。これは、イノシシ、シカの生息の数上で極端な差違のあったことを推測せざるを得ない。シカの四肢骨の中には大型のものがあり、九州木島からでなく、本州あるいは朝鮮半島から運ばれたものがあるのではないかと推測させるのである。

ところで、イノシシは上述のように多くの骨をのこし、頭蓋、下顎骨、四肢骨など各部位の骨をのこす。若獣から成獣までの個体を含み、当時この島に多数棲息していたのであろう。

ノウサギ、テン、ネズミ類がその他の獣であるが個体数は極めて少ない。現生するツシマヤマネコの骨は確認することはできなかった。一方海棲獣として、クジラ類、アシカがある。クジラ類には、ゴンドウクジラ程の大きさのもの、イルカ類程の大きさのものがあったが、ほとんど脊柱骨をのこすのみであった。他にクジラ類の大形骨片があった。クジラ類よりも多くの骨をのこしていたのはアシカ類である。何故か頭蓋、下顎骨は全くみられず、椎骨と四肢骨のみであった。幼、成獣、雄、雌の個体があり、この海域に繁殖集団をつくっていたのであろう。ただ、捕獲個体数の上ではイノシシなどに及ばない。

最後にイヌであるが、埋葬骨などの発見はなかったが、7~8個体分の骨が出土しており、イヌの骨の出土としては多い方とみてよいであろう。幼、若、老成の個体、雄、雌の個体があると推定され、これらが狩猟犬として飼育されたものであったことは、疑いない。大きさは縦文状の一般にみる小形犬と同大のものとみてよく、下顎骨には縦文人にみられるたくましさをみることができた。

佐賀貝塚動物遺存体の特徴

佐賀貝塚の脊椎動物は以上に述べたように、陸獣のイノシシを主体として、それに海棲のイルカ、アシカ類があり、また魚骨も少なくなかった。佐賀貝塚人の漁・獵に対する積極的な姿勢をみることができ、これが石器や骨角器に反映しているといつてもよいであろう。こうした標榜は九州北西部の外海に面した貝塚、島根の貝塚の諸例においてみられたものであって、地域による差違はもちろんみられるものの、基本的には本貝塚にみる如き性格をもっているといってよいであろう。木貝塚の資料の精査によって、この地域の動物相がようやく明らかにされ

ことになろう。また、先にものべたが、本貝塚でのイノシシ、シカの骨の出土状況は、過去の対馬における大型獣の生息状況を考えさせる重要な資料となるものであって、生物分布の問題上注目される点であろう。一方、現生するツシマヤマネコなどの骨の検出できなかつたことは縄文人の狩猟の性格を考える上で注意しなければならないことであろう。

さらに、本遺跡が島嶼であることから、種々動物が摂入されていることがある。その一つは先にものべたシカであって、これは一頭であったが大型の尺骨があった。これはキュウシュウジカとみるよりも、本州若しくは朝鮮半島からの搬入である。若し、この島にシカが棲息しているとすれば、特にシカの尺骨を搬入する理由は無いように思われるるのであるが、時に大型の骨を骨器として使用する目的があつたからであろうか。

なお、加工品中にキバノロの犬歯1点があつたことである。これは明らかに朝鮮半島からの搬入品であり、彼我の直接的な交流のあったことを裏付ける興味ある資料であろう。また四肢骨については本回の資料中にみることがなかったので、これは犬歯のみをえらんで追ばれたのであろう。キバノロは、朝鮮半島に分布し、新石器時代からそれ以後の遺跡からの出土例が知られる。

9. 長崎県・佐賀貝塚の貝類より見た考察

I 序

昭和60年4月8日から、5月10日までの間、本遺跡の発掘が行われ、そのおりの資料分析の依頼を受けた。直接調査を行い、この機会を与えて下さった長崎県教育庁文化課主任指導主事正林達氏はじめ関係諸氏に深甚の謝意を表るものである。

II 本遺跡の発掘概況

本遺跡は第1図に示すように、長崎県上県郡峰町大字佐賀486に所在し、第2図に示すように、南には駄道川をはさんで三木松山、北には175mの峰が急傾斜で迫り、この山麓にひらけた標高2.5~3mの台地に本遺跡はある。本遺跡の立地する台地は、土壠分析より、縄文前期の堆積台地であると考えられる。包含される土器は、鰐ヶ崎式等を中心とするもので縄文時代後期と判断された。遺物は、石斧300点以上、ヤス200点以上、人骨6体、住居跡4棟が記録された。



第1図 対馬・佐賀貝塚位置図



第2図 佐賀貝塚周辺図

III 貝類を中心とする資料の分析

各トレンチ内で発掘された貝類のトレンチ別抽出資料および土壤ごとのブロック抽出標本であった。

資料は、種ごと個体数を計出し、5,283個体を数えた。本遺跡の貝類組成は、第1表に示した。土壤資料は、標準簿で算い、土壤組成を分析し、微小自然遺物の抽出を行い、本遺跡をのせる今地が海成層であること、標高および立地条件より、縦文前期の堆積層であると判断した。

IV 貝類より見た遺跡形成時の自然環境の復元

第1表を生態群集別に表示したのが第2表である。貝類の主体をなすものは78.59%を占める。潮間帯岩礁群集で、第1表で示すように、スガイ・オオコシダカガシガラ・サザエ・レイシガイ・クマノコガイ等を常食としていたと考えられる。第2表1群で示したこれらの貝は現在でも遺跡周辺で採集は可能である。しかしウミイボニナ・フトヘナタリ・マガキ・オキシジミ・ミルクイ等、潮間帯砂泥底水群集が1,043個体19.74%発見されているのに、現在の周辺海域では採集できない。このことは、本遺跡形成当時、遺跡周辺域にラグーンの発達があったと考えられる。これは、本遺跡直下の駿河川川口より佐賀川川口部、佐賀小学校や佐賀神社をのせる一帯が可能性が高い。(第2図参照)

なお正林等は、出土状況・底質の状況より、標高2m線に当時の海岸線があったと推定している。このようであれば、当時2mまで海であったと考えられ、より正確な調査が望まれる。

V その他貝類より推定されること

a 潜水漁法の発達 第1表～第2表で示したように、本遺跡出土貝類は、第2表IV～VI群で示されるように、ミガキボラ・ミガキナガニシ・ベンケイガイ・ヒオウギ等、水深5～20mの種、テングニシ・イタヤガイ等水深10～80mのものが発見され巨大である。1群のサザエ・アワビの中にも驚くほど大きいものが発見される。もし漁網で採取していたものであれば、大小さまざまのものや稚種も発見されるはずであるが、大型のものだけ採取しているのは、潜水漁法が発達していたと考えられる。

b 韓国との交易 133個の貝輪が発見されているが、その種別構成は第3表に示した。本遺跡周辺で採集可能なものは、ベンケイガイ・サルボウ・タマキガイ・マツバガイ・チョウセンハマグリ・ホシキタタ・ウチムラサキの7種であるが、サルアワビ・ユキノカサの2種は、本邦東北以北および韓国寒流域で分布するもので、対馬では現在発見されていない。また東北以北から輸入されたといふ証拠も今のところない。むしろ韓国との日本海側との交流があったのではないかと考えたい。獸骨の中にもノロの犬歯が発見されたり、土器の中に朝鮮系と考えられるものが混在していることからも韓国との交易の可能性が強いと考えられる。土器・石器等か

ら見なおしが必要と思われる。

●陸産貝について ツシマケマイマイはカタツムリの一種であるが、現在、対馬；仁田・三根・海津神社・八瀬・永泉寺・佐須奈・出山勝・内院浦・戴原・中原と長崎市；南山手・崇福寺・筑後町福濟寺・浦上天主堂・芦無町・岩尾山・本河内等に採集記録がある。対馬一帯と長崎市周辺区という、とびきなれた分布は、人為的搬入か、広域分衍していたものが途中で絶滅したかを考えないと説明つかないものである。しかし今回、木造跡の発掘土中から発見されたことは、対馬に古くから生息していたこと、対馬へ人為的に搬入されたものでないとの証拠といえる。

参考文献

- 山本愛二(1962)：五島扶桑町寄神貝塚に関する考察、五島遺跡調査報告書、42～51。
- 山本愛二(1963)：五島江別貝塚の貝類、曾根式土器に関する研究、櫛文文化研究会、70～72。
- 山本愛二(1974)：熊本県小山貝塚の貝類、青烟式土器に関する研究、櫛文文化研究会。
- 山本愛二(1975)：対馬・佐吉半貝塚の貝類、長崎県文化財調査報告書第20集、4～5。
- 山本愛二(1976)：志多賀貝塚の貝類より見た遺跡形成時の自然環境の復元、対馬の生物、長崎県生物学会、49～57。
- 山本愛三(1977)：壱岐・原ノ辻遺跡を中心とする壱岐の先史生物、壱岐の生物、長崎県生物学会、81～87。
- 山本愛三(1978)：長崎県串島貝塚より見た遺跡形成時の自然環境の復元、長崎県文化財報告書第51集、137～146。
- 山本愛三(1981)：五島沿岸貝塚の名校・対馬との対比、五島の生物、長崎県生物学会、509～542。
- 山本愛三(1984)：長崎県・有吉貝塚の貝類より見た考察、諫早市文化財調査報告書第5集、69～77、pl. 19。

第1表 対馬・佐賀遺跡出土貝類組成表（一部豪華類を含む）

No.	種	名	個体数	%	群集型
1.	<i>Turbo coronata coreensis</i> (RECLUZS, 1853)	スガイ	1,917	36.28	
2.	<i>Batillus cornutus</i> (L'GHTFOOT, 1795)	サザエ	745	14.18	
3.	<i>Reishia bromii</i> (DUNKER, 1860)	レイシガイ	299	5.66	
4.	<i>Omphalius pfeifferi</i> (Gmelin, 1791)	オオコシダカガニガラ	238	4.50	
5.	<i>Chlorostoma argyrostoma turbinatum</i> (A. ADAMS, 1853)	ヘソアキク ガイ	160	3.03	
6.	<i>Reishia lanigera</i> (KÜSTER, 1860)	イボニシ	156	2.95	
7.	<i>Chlorostoma nigricolor</i> (DUNKER, 1860)	クマノコガイ	123	2.33	
8.	<i>Sairgyarca virescens</i> (REEVE, 1884)	カリガネエガイ	121	2.29	
9.	<i>Manododonta lobio confusa</i> (TAPPARONE-CANTAFIO, 1874)	イシダタミ ガイ	105	1.99	
10.	<i>Belanus tintinnabulum volcano</i> (PILSBRY, 1890)	オオアカフジツボ	79	1.49	
11.	<i>Omphalius rusticus</i> (Gmelin, 1791)	コシダカガニガラガイ	61	1.15	
12.	<i>Chlorostoma argyrostoma lischkei</i> (TAPPARONE-CANTAFIO, 1874)	クボ ガイ	34	0.64	第 型
13.	<i>Neriodis sieboldi</i> (REEVE, 1846)	メカイアワビ	20	0.38	
14.	<i>N. discus</i> (REEVE, 1846)	クロアワビ	16	0.30	I
15.	<i>Muricodrupa fusca</i> (KOSTEP, 1882)	レイシガイダマシモドキ	15	0.28	
16.	<i>Tetracilis squamosa</i> (BRUGUÈRE, 1895)	クロフジツボ	12	0.23	
17.	<i>Neriodis gigantea</i> (Gmelin, 1791)	マダカアワビ	9	0.17	
18.	<i>Serpulorbis imbricatus</i> (DUNKER, 1860)	オオヘビガイ	9	0.17	
19.	<i>Cellana nigrolimata</i> (REEVE, 1854)	マツバガイ	6	0.11	
20.	<i>Neriodis</i> sp. アワビ類の片切		5	0.07	
21.	<i>Sulculus aquatilis</i> (REEVE, 1846)	トコブシ	4	0.07	
22.	<i>Spondylus balbus</i> (REEVE, 1856)	ウミギクガイ	3	0.05	
23.	<i>Septifer virgatus</i> (WICCMANN, 1837)	ムラサキイソコガイ	3	0.05	
24.	<i>Cellana grata stearnsii</i> (PILSBRY, 1891)	アミガサガイ	3	0.05	
25.	<i>Rissoa luteostoma</i> (HOLTER, 1803)	クリフレイシガイ	2	0.04	
26.	<i>Omphalius nigerrima</i> (Gmelin, 1791)	ヒメクボガイ	2	0.04	
27.	<i>Astralium haematragum</i> (MENKE, 1829)	ウラウズガイ	1	0.02	
28.	<i>Amathina conica</i> (SCHUMACHER, 1817)	ヒクズヌメガイ	1	0.02	
29.	<i>Drupea elatiformis</i> (LAMARCK, 1799)	ヒロクチイガレイシガイ	1	0.02	
30.	<i>Spondylus cruentus</i> (LSCHE, 1868)	チリボタンガイ	1	0.02	
31.	<i>Butilaria zonalis</i> (BRUGUÈRE, 1792)	イボウミニナ	509	9.63	
32.	<i>Cerithidea rhizophorarum</i> (A. ADAMS, 1855)	フトヘナタリ	509	9.63	第 II型
33.	<i>Crassastrea gigas</i> (THUNBERG, 1793)	マガキ	18	0.34	
34.	<i>Cyclina sinensis</i> (Gmelin, 1791)	オキシジミ	4	0.07	
35.	<i>Tresus keenae</i> (KURODA et HABE, 1952)	ミルクイガイ	1	0.02	
36.	<i>Glossaulax didyma</i> (RÖDING, 1798)	ツメタガイ	2	0.04	第 III型
37.	<i>G. d. hiszoyai</i> (KURODA et KIRA, 1959)	ホソヤツメタガイ	1	0.02	
38.	<i>Mytilus corsicus</i> (GOULD, 1851)	イガイ	66	1.25	第 IV型
39.	<i>Saxidomus purpuratus</i> (SOWERBY, G. B. II, 1852)	ウチムラサキ	1	0.02	
40.	<i>Circa scripta</i> (LINNE, 1758)	シラオガイ	1	0.02	
41.	<i>Mimachlamys nobilis</i> (REEVE, 1852)	ヒオオギ	2	0.04	第 V型
42.	<i>Gomphina veneriformis</i> (LAMARCK, 1818)	オキアサリ	2	0.04	
43.	<i>Ponda vitellus</i> (LINNE, 1758)	ホシキヌタ	1	0.02	
44.	<i>Monoplex echo</i> (KURODA et HABE, 1950)	カコボラ	1	0.02	
45.	<i>Kelletia lischkei</i> (KURODA, 1938)	ミガキボラ	1	0.02	第 VI型
46.	<i>Fusinus similis</i> (BIRD, 1873)	ミガキナガニシ	1	0.02	
47.	<i>Glycymeris albolineata</i> (LINSCHKE, 1872)	ベンケイガイ	1	0.02	
48.	<i>Pigilina isernatana</i> (Gmelin, 1791)	テングニシ	8	0.15	第 VII型
49.	<i>Pecten albicans</i> (SCHREITER, 1802)	イタヤガイ	4	0.07	
50.	<i>Aegista trochula</i> (A. ADAMS, 1868)	ツシマケマイマイ	4	0.07	第 VIII型
総 計				5,283	100%

第2表 生態群集別員類構成表

生 態 群 集	個 体 數 (%)
I 潮間帶 岩礁群集	4,152 (78.59)
II 潮間帶 内湾砂泥底汽水群集	1,011 (19.70)
III 潮間帶 ~ 30 m 砂 ~ 砂泥群集	3 (0.05)
IV 深瀬羽带下部 (~ 30 m) 群集	68 (1.25)
V " " (5 ~ 10 m) 群集	2 (0.04)
VI " " (5 ~ 30 m) 群集	7 (0.13)
VII " " (10 ~ 80 m) 群集	12 (0.22)
VIII 陸 底 頁	4 (0.07)
計	5,283 (100)

第3表 対馬・佐賀遭跡の見輪種別構成表

種 名	個 数	分 布 域
ベンケイガイ	110	北海道南部, 本州, 四国, 九州, 朝鮮, フィリピン
テルボウ	7	" " " " 台湾, 中国
タマキガイ	4	本州(房総以南), 四国, 九州
マツバガイ	3	" " " 台湾, 西太平洋
サンアワビ	3	北海道, 東北, 日本海北部, 朝鮮
エキノカサ	2	サハリン, シベリア, 千島, 朝鮮, 北海道, 東北
ショウセンハマグリ	1	木州(房総以南), 四国, 九州, 台湾, 朝鮮, 中国
ウミウサギ	1	本州(紀伊以南), 四国, 九州, 台湾
ホシキヌタ	1	本州(房総以南), 四国, 九州, 台湾, インド太平洋
ウチムラサキガイ	1	北海道(南部), 本州, 四国, 九州, 朝鮮
計	133	

10. 佐賀貝塚発掘調査の成果と今後の方向（まとめにかえて）

(1)建物遺構の検出 佐賀貝塚の調査において建物遺構4を検出した。対馬における遺跡の調査は、古くから数多く行われてきたが、墓地等の調査が主なもので、明確な生活遺構の検出はきわめて稀少であり、時期をとわず生活実態の研究は遅れていたといえる。理由としては、対馬における生活可能な空間が相互に隔離された海岸の狭隘な場所に限られ、古来この条件が変化していないこと、が考えられてきた。この予測は、今回の調査において実証されたわけであるが、同時に対馬における住居跡等の生活遺構の研究は、現在の家屋等の改築等、かぎられた条件と機会を経る以外に方法が乏しいことを意味している。今回の調査は、その意味で関係方面的の連絡を緊密にすることの必要を、より的的に示したといえよう。本報告に際して、今次検出の建物遺構に関する検討することになるが、石斧製作跡と見られる4号建物遺構は特に注意しておく必要があろう。

(2)石器石材の分布について 本貝塚の調査で検出した各種の石器は多量であるが、特に石斧の多量出土と未成品・砾石の供伴が注目される。これらの石斧は、一遺跡にしては多量にすぎるものであり、多分に本遺跡が石斧の製作と供給地的性質を示していると考えられる。今後、これらの石材について産地同定と分布範囲の研究が課題となろう。また、本文執筆完了後において、東京教育大の二宮氏から、本貝塚出土の黒曜石石材の大半が伊万里市腰岳産のものであるという検討結果をお寄せいただいた。このことは、黒曜石原産地をもたない対馬において、きわめて重大な意味をもっている。本貝塚出土の石器そのものについても、ノミ状片刃磨製石器の多量出土や、大型剣片鐵等(石鉄)の出土など、対馬縄文人の生活実態に迫る好資料といえるが、前述の石斧材についての研究が、より重大な課題であろう。

(3)埋葬人骨の検出 墓葬人骨6体、散乱人骨2個体分を検出したが、対馬における人骨の検出は、数多くの墓地調査にもかかわらず稀少で、わずかに志多賀貝塚の調査において幼児骨の検出を見るにとどまっていた。したがって、時期の問題を考えて、対馬における古人骨の形質研究に、本貝塚出土の人骨は重大な意味をもっているといえよう。今次報告書において、人骨に関する報告は、葬送の都合で省略し、本報告に譲る結果となつたが、木書では検出個体数の報告と埋葬状態の写真を示すにとどめたことを報じておく。

(4)骨角器資料について 西日本においては稀有の骨角器出土量を見たが、対馬の縄文時代における研究に重要な資料である。総じて西北九州形の骨角器文化の大半の中で理解されるものであろうが、キバノロ犬歯製の垂飾や、一部只製品の原材料については、朝鮮半島産のものが搬入された可能性がきわめて高い。一方、対馬においては、独特の動物の牛骨が言われており、特に天然記念物のツシマジカは著名であるが、本貝塚出土の動物遺存体の中において、シカ類の量はきわめて少く、イノシシの遺存体数と大きな差異が指摘されている。このことは、両者の牛骨数の差異によるものが、対馬縄文社会における両者の扱いの差によるのが、きわめ

て重要な問題となろう。

〔註・参考文献〕

- 新対馬島誌編集委員会「新対馬島誌」、1964。永留久恵「対馬の古跡」、1965所収。
- 正林謙「金石城」鹿屋市文化財調査報告書第1集、厳原町教育委員会、1985。
- 対馬郷町の研究家阿比何喜博氏の保管資料に同寺出土とされる瓦当資料がある。
- 島根県広瀬町教育委員会「史跡・田城跡」一皆谷地区第1次調査調報-1985。なお筆者も資料を実見した。
- 永留久恵氏（県立対馬歴史民俗資料館研究員）の教示による。
- 九州大学考古学研究室編「対馬」、1974。
- 註1と同じ。但し、増田氏等による調査報告書未刊。
- 鶴川光夫「宮下貝塚」長崎県文化財調査報告9、長崎県教育委員会、1971。
- 中島直之他「美和」、吉津市、1982。
- 小田富士雄「五島列島の券牛文化」総説篇、長崎大学医学部解剖学第二教室、1970。
- 中島香郎氏「草野貝塚」、昭和57年度発掘調査概報、鹿児島市教育委員会、1983。
- 鹿児島県立歴史資料センター黒川義「貝塚は語る」、南九州の縄文文化一、1985所収。
- 外海町教育委員会「出津遺跡」、1983。
- 旁島貞康「有脊貝塚」、淡路市文化財調査報告第5集、淡路市教育委員会、1984。
- 渡辺誠「西北九州の縄文時代沿岸文化」、列島の文化史2、日本エディタースクール、1985。
- 註15に所収要版。
- 森成秀藏「縄と帶」、—有脊貝塚の研究—国立歴史民俗博物館研究報告第7集本篇、国立歴史民俗博物館、1985。
- 時刻的には異なるが、韓国馬山外山城山貝塚で同種の垂飾品が出土している。椎夢庵他「馬山外山城山貝塚発掘調査報告」、文化公報部文化財管理局、1976。
- 平凡社「民俗学体系」5巻によれば、シカの胎児の皮など、うすい皮を張り、尚手指でもって緩急を調節して発情期の雄シカの音声をまねるという。
- 安奈鶴・鷹田利希「名古遺跡」、長崎県文化財調査報告第7集、長崎県教育委員会、1985。
- 坂田邦洋「赤多留貝塚」、『対馬の考古学』所収、縄文文化研究会、1976。

〔表紙図版〕

表表紙 繩文後期の骨刀器（木文岡版29参照）

裏表紙 繩文後期石器、上下45cm

佐賀貝塚

昭和61年3月31日

発行 峰町教育委員会

長崎県上県郡峰町大字三根451

電話 09208 3-0301

印刷 株式会社 隆文社

佐世保市瀬戸越3-4-7

